

うんこう
雲岡石窟調査報告書をめぐって

文教科学委員会 専門員

とだ ひろし
戸田 浩史

中国大同の雲岡石窟は5世紀北魏仏教を代表する壮大な遺跡である。昭和初期には盗掘被害を受け、廃寺に近かったが、日中戦争最中の昭和13年から19年までの7年間、東方文化研究所（後の京都大学人文科学研究所）の水野清一、長廣敏雄両氏を中心に本格的な学術調査が実施された。大量の細密な写真や拓本、実測図面等の成果を得たが、20年3月の東京大空襲により製版中の報告書原稿が焼失してしまった。その後、資金不足のため出版は難航したが、26年3月に第1回配本が刊行された。同年9月のサンフランシスコ講和会議の際、吉田茂総理が持参して大学や文化団体等に寄贈し、日本が戦時中に中国の文化財を保護し、大規模で精密な調査を実施したことや、戦後の困難な時期に学術上比類のない成果を発表したことが国際的に高く評価された。以下、この経緯について紹介したい。

刊行前年の昭和25年春、白洲次郎夫人正子の紹介で、京大人文科学研究所長の貝塚茂樹教授が吉田総理に面会し、雲岡石窟調査の成果の出版を陳情した。総理は貝塚教授の人柄に感服するとともにその意義を認め、池田（勇人蔵相）に頭を下げて頼むのは嫌だがと言いつつ快諾したという。一方、同研究所の桑原武夫教授によれば、戦後、研究所を訪れたフランスの歴史家ルネ・グルッセが雲岡の研究成果に大変感心した。彼が吉田総理に招待されていると聞き、桑原教授がグルッセに頼み、総理との面会の際、「日本は科学は進んでいるが、このような研究成果を出版せず放置しているのでは文化国とはいえぬ」との趣旨を言わせた。案の定、総理は烈火のごとく怒り、文部省に厳命したのがきっかけという。

昭和26年度予算編成中の某日、吉田総理は、剣木亨弘文部事務次官を突如呼び出し、文部省予算での出版を依頼した。剣木次官はやればできるとは思ったが、少ない予算をできるだけ多くの学者に回したいと考え、その程度なら池田蔵相の肩を一つ叩けば何でもないと云ったところ、総理は池田に話すくらいなら君には頼まぬと激怒した。結局、剣木次官は文部省予算で措置した。後に剣木は吉田政権下で官房副長官、参議院議員にもなったが、吉田は政界引退後も剣木のことを、頼みを断ったけしからん奴と言っていたという。

昭和26年4月、長廣教授が吉田総理に刊行直後の報告書を届けた。総理はこのように立派な書物が進駐軍の占領下、講和会議前に完成したことは外交に携わる一員として大変うれしと述べ、同年9月のサンフランシスコ講和会議に持参することを決めたという。

それから6年、昭和31年に『雲岡石窟』全16巻32冊が完結した。終戦時に中国からの持ち出しが禁じられていた一部の実測図も、32年に訪中した水野教授に中国科学院の郭沫若院長より返還され、50年に続補として刊行された。『雲岡石窟』は印刷部数が少なく、入手困難だったが、平成26年に中国語版が出版されるのに合わせ、未収録の図版等を加えた増補版が刊行された。研究者の努力はもちろん、研究成果公表の意義を認め、尽力された多くの人々のおかげで今日人類の貴重な遺産を目にすることができるのは幸いである。